

子どもの切実な「問い」を育む学びの創造を
～はじめに代えて～

学校長 船越 勝

2015年度の『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』を刊行することになりました。この紀要も、今号で第39集となりますが、今年度の教育研究発表会を中心に、附属小学校の一年間の研究活動の成果をまとめ、それを全国に発信する役割をこの間ずっと果たしてきました。私たち附属小学校の研究内容が一目でわかると各界から確かな評価もいただいていた参りました。

さて、今年度の附属小学校の研究テーマ（主題）は、「問い続け、学び続ける子どもたち」というものです。昨年度までの3年間の「学びをデザインする子どもたち」という研究テーマは、学びをデザインする、つまり、創り出すのは、何よりも子どもたち自身であり、そうした自主的に学びをデザインしていくことができる力を持った学習主体として子どもたちを育てていくことでした。

今年度の「問い続け、学び続ける子どもたち」という研究テーマは、自主的に学びをデザインしていくことができる子どもを育てるという点は継承しつつ、そのためには、子どもはまず問いを持つ主体であることが必要だという教育学的確信に基づき、「問い続ける」子どもという視点からテーマ性を再設定したものであると言うことができます。

子どもの問いと学びのあり方をめぐっては、大田堯氏がかつて「問いと答えの間」という言葉を提起し、その「間」が短くなってきていることに警鐘を鳴らしましたが、近年、そうした傾向に拍車がかかっているように思われます。つまり、教師の問いであっても、子どもからの問いかけであっても、それにいち早く「正答」を与えることが学習のあり方として望ましいという考え方です。「一問一答」式というのは、その最たるあり方でしょう。

しかし、子どもの学びを深化させていく上で大切なのは、一つの問いかけに対して、子どもたちが様々な自分なりの考えを出し合い、それに対して、絡み合って対話と討論が進んでいくような学びのあり方、言い換えれば、問いから学びが出發して、さらに次々と新しい問いが生み出されてくるという「問いの螺旋的な発展」として紡ぎ出されてくる学びのあり方ではないでしょうか。

このようにして、私たちは、「問いと答えの間」が子どもたち自身の力で長くなっていくような学びを創り出し、それを可能たらしめるような「問い続ける」学習主体としての子どもを育てていきたいと考えています。

このように考えますと、「問い続け、学び続ける子どもたち」という研究テーマは、対象・他者・自己に対して、「問い続ける」子どもという新しい学習主体としての子ども像だけでなく、そうした子どもたちの対話と討論のよる「問答共同体」の創造という新しい学びの生成のあり方を提起していることにもなるのです。

こうした意味合いも含んだ私たちの研究成果をまとめたこの紀要を是非ご一読いただき、忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。また、この紀要が私たち附属小学校と公立校の現場との「問い」を共有し、深めるツールになっていければと希んでいます。

最後になりましたが、今年度も本校の様々な教育研究活動にご協力いただきました皆様に感謝するとともに、来年度も引き続き皆様とともに歩んでいきたいと願っております。

2016年3月